

# 大正期破綻銀行のリスク選好と“虚業家”

——佐賀貯蓄銀行と田中猪作をめぐるビジネス・モデルの虚構性——

High-risk Preference of Failure Banks in the Taisho Era and Connections  
with “High-risk Lovers”

— Focusing on False Business-model of the Saga Saving Bank around Isaku Tanaka —

小 川 功

## 要 旨

筆者は近年は主に大正期に取付・破綻した銀行・企業群とその実権者のリスク選好の分析を進めつつあるが、今回はこれまであまり紹介されてこなかった佐賀貯蓄銀行が対象である。本稿は明治29年「佐賀財閥」の共同経営の庶民貯蓄機関として設立され、「葉隠武士」で名高い旧佐賀藩主・鍋島家元重臣の旧士族人脈で構成された佐賀貯蓄銀行のビジネス・モデルの変容を取り上げる。当初の「所謂士魂商才と云った様な型」の堅実なビジネス・モデルが、大正初期から次第に破綻に繋がるようなハイリスク・モデルに変容する契機を、主に田中猪作というハイリスク選好者としての「虚業家」との抜き難い因縁によって仮説的に説明しようという試論である。田中は政治家を志し、代議士に立候補する一方で、数多くの新設企業の創業に関わる職業的発起人であり、同行とは別に中央生命保険（別稿を予定）を自己の機関金融機関として収奪しようと乗取りを敢行した「山師」的人物と評されている。旧士族としての教養もあり、「佐賀財閥」の名流に連なる銀行幹部連が揃ってアウトサイダーに取り込まれ、虚偽の預金証書多数を乱発し同行を破綻に陥れる犯罪行為に何故に走ったのかが筆者の主たる関心事である。同時期の地方銀行の不祥事件として大相場師・石井定七に巨額の架空預金証書を提供した高知商業銀行が著名であるが、石井は過去に何度も同行を救済した大株主で重役は石井の無理な要求にも従わざるを得ない因縁にあった。しかし田中は佐賀貯蓄大株主でもなく、とりたてて深い義理も感じられない。「予審決定理由書」など参照し得た資料の限界から十分に実証するには至らないが、銀行幹部が大戦景気・大正バブルの中で「虚業家」の言葉巧みな甘言に煽られ、投機的利益を獲得すべく、新設企業群（結果として泡沫企業）への創業金融という一種の投資銀行的なハイリスク・モデルに自ら転換し、株式担保金融の占率を異常に高めていったのではないかとこの現段階での仮説を紹介する。

## はじめに

筆者は大正期に取付・破綻した銀行群とその実権者の分析を進めつつあるが、当初に確立したはずの相応のビジネス・モデルが破綻に繋がるハイリスク・モデルに変容する要因の一つにハイリスク選好者としての『虚業家』<sup>(1)</sup>というキーワードを仮説として想定して、すでに若干の銀行経営者等について分析してきた。今回は地方財閥「佐賀財閥」の共同経営銀行たる佐賀貯蓄銀行の破綻事例をとりあげたい。『虚業家』概念は昨今話題のサブプライム問題の本質を理解するにも有効かと思慮するが、ここでは触れないこととする。

佐賀貯蓄銀行について『佐賀銀行百年史』では2頁、『佐賀市史』では僅かに数行程度の記述(市史, p166)にとどまるなど、数少ない先行研究の中で本間靖夫氏は同行を佐賀財閥三家の共同経営と見做した<sup>(2)</sup>。また神山恒雄氏は同行の取付・経営危機・破産を「佐賀財閥」系銀行の連鎖的崩壊現象の最初に位置付け、鍋島家からの寄贈にも言及している<sup>(3)</sup>。

本稿では佐賀県銀行の中で数少ない破産手続を受けた佐賀貯蓄銀行を取り上げ、神崎実業銀行、古賀銀行の両行に先立って、むしろ佐賀銀行界の連鎖的破綻の端緒となったと推定される「佐賀財閥」の共同経営のはずの佐賀貯蓄銀行の架空預金事件の発生した背景を田中猪作という「佐賀財閥」のアウトサイダーともいふべき“虚業家”との癒着関係を中心に分析したい。田中が佐賀貯蓄銀行とともに機関金融機関として収奪しようとする乗取りを敢行した中央生命保険については別稿<sup>(4)</sup>を予定している。また佐賀百六銀行との債務者の共通性、破綻の連鎖性の検討や、ビジネスモデルの変容の今一つの要因と想定される定期積金の導入など取扱商品面については稿を改めたい。なお本稿<sup>(5)</sup>では紙面の制約上、頻出する同時代資料等は文末の「引用文献略号一覧表」に掲げ、本文中では注記せず略号で( )内に示す方式をとった。

## I. 佐賀貯蓄銀行

## 1. 佐賀貯蓄銀行の概要

佐賀貯蓄銀行は日清戦後における貯蓄銀行熱を反映して(市史, p166)中野致明(第百六国立銀行)、伊丹弥太郎(栄銀行)、深川喜一郎(深川財閥, 地所会社)、古賀善兵衛(第七十二国立銀行→古賀銀行)ら「佐賀市の重なる銀行関係者主宰の下に市内外の有志を糾合」(実勢, p36)し、伊丹らが明治29年10月30日「佐賀貯蓄銀行を企画創設して佐賀市民に貯蓄を奨励」(人物, p2)すべく資本金5万円(払込2万円)で設立され、29年12月7日佐賀市呉服町11番地に開業した。(佐百, p674, 変遷, p292)

このように「昔時より密接の関係を有する」(人物, p3)伊丹、深川「両家が事業界に活躍すること概ね歩調を一にせり」(人物, p3)「多くの企業に参加し、その経済力を背景にして佐賀地域社会の中で際立った存在」(市史, p179)であった。したがって「佐賀市付近の公私に涉っ

て少し重立った事業は片端から〈伊丹〉弥太郎氏の名を要し、其の記載と否とでは、事業其物の盛衰成否に関する」(将来, p864)ほどと称された<sup>(6)</sup>。

明治42年10月18日同業者の不動貯金銀行が佐賀市に代理店を開設し(佐百, p949)、大正3年10月25日共栄貯金銀行(本店東京)<sup>(7)</sup>が佐賀市白山町84に支店を開設(帝T5, p4)した際にも「佐賀県は歴史的に保守的なところで、県外から進出してくる金融機関にはすこぶる冷たく」(県経, p154)対応したとされるが、伊丹、深川両家を背景とする佐賀貯蓄銀行は「佐賀市土着の貯蓄銀行として一般に相当信用を以て迎へられ」(実勢, p36)たと思われる。

日露戦争後に百六、古賀、栄の各行、地所株式会社信用部、佐賀県農工銀行、肥前貯蓄銀行との七行による手形交換組織に参加したが、その世話役は百六銀行が務めた。(県経, p157)佐賀貯蓄銀行は32年11月北方村に出張所を開設、41年時点では中川副村福富、久保田村徳万、北方村、武雄町<sup>(8)</sup>、轟木村鳥栖に代理店を配置(日韓, p3)、大正2年時点では牛津町が加わって代理店は6店、「漸次代理店の数を増加して」(実勢, p36)7年6月現在で県内5郡に14店であった。商品面では2年時点では「貯蓄預金利息年六分、取扱金十銭以上」(案内, p33)、5年3月に3年・5年満期の定期積金を開始した。(実勢, p36)

## 2. 初代頭取中野致明

佐賀貯蓄銀行の初代頭取になった中野致明(佐賀市赤松町)は旧佐賀藩家老の中野数馬の長男に生れ、明治16年第一百六国立銀行支配人、18年取締役役に昇任、鍋島家家扶でありかつ旧藩主が関係する百六銀行2代頭取として「旧藩主及同郷の間に徳望信用を有し」(将来, p1000)ていたため、伊勢講会のメンバーから明治30年佐賀商業会議所創立時の発起人・創立委員・定款起草委員となり、明治31年1月原口良輔(佐賀米穀取引所理事長)に代り2代会頭に就任(あゆみ, p488)、40年広滝水力電気社長に就任(県商, p4)、厚生舎舎主(日韓, p4)、佐賀セメント取締役(実勢, p211)、久留米電灯監査役(実勢, p195)、肥前漁業相談役(帝T5職, p141)などのほか、明治34年佐賀馬車鉄道<sup>(9)</sup>発起人となったのをはじめ県内企業の育成を支援し、たとえば大正初期には「相互利害の関係を共にすべき性質を有するを以て」(T8.8.13佐賀)佐賀馬車鉄道と川上軌道両社の合併をあっせん(県経, p171)するなど、佐賀財界首脳として重要な役割を果たした。また明治45年九州電灯鉄道の成立時にも佐賀側の持株を取纏め、相談役の福沢桃介に働きかけ「本社を福岡とせば佐賀より社長を揚げんと唱へ」(M45.7.2佐賀)、伊丹弥太郎を社長に推す役割を果たし、自己も初代取締役・監査役1660株主(実勢, p187)を歴任した。

百六銀行で「日々行務の実際に鞅掌して居」(将来, p920)た吉田久太郎が大正5年実業界を引退した「中野致明氏の後を襲ふて」(T10.2.15実業之佐賀)、姉妹関係と見られた百六、佐賀貯蓄両行の頭取となり、6年2月佐賀商業会議所3代会頭にもなった。

『佐賀銀行百年史』は佐賀貯蓄銀行の人脈について「特に頭取は佐賀百六銀行から来たものが多く…佐賀百六銀行の姉妹銀行としての色彩を強めていった」（佐百, p674）と指摘するが、百六銀行系統の人物が頭取、専務、支配人と執行部を形成しているのは、県内有力行による共同出資という佐賀貯蓄銀行の微妙な大株主ガバナンスの関係上、旧藩主が大株主であり、「佐賀財閥」各家とは独立し、比較的中立的な位置にある百六銀行系統の人物が各行の力学上すわりがよく、例えば手形交換組織、佐賀商業会議所、地元鉄道統合等の世話役をしばしば演じたのと同様に、佐賀貯蓄銀行においても古賀財閥の出資比率での優越性とは別に百六銀行系統の人物が多数占拠するに至ったものと推測される。

### 3. 二代頭取吉田久太郎

頭取の吉田久太郎（佐賀市松原町）は「資性謹直清廉にして識見高邁崇高なる人格は皆人の畏敬する所」（T10.2.15 実業）と評された。吉田は慶応3年5月16日佐賀藩士吉田儀平太の長男に生れ、英吉利法律学校中退、明治27年12月家督相続、28年九州生命<sup>(10)</sup>設立時の取締役（T10.2.15 実業）、31年百六銀行取締役兼支配人、43年九州電気監査役、九州電灯鉄道取締役、門司汽船発起人、有田製磁を創立。大正4年「故中野致明氏の後を襲ふて百六、佐賀貯蓄両銀行の各頭取となり」（T10.2.15 実業）、6年2月佐賀商業会議所会頭就任（T10.2.15 実業）、6年時点では肥前漁業副社長、佐賀百六銀行、佐賀貯蓄銀行、唐津築港、九州電化工業、深川製磁各取締役、九州電灯鉄道、深川造船所、九州板紙各監査役（人 T7, よ p45）、6年5月では伊丹弥太郎と同額の博多株式取引所 ⑥ 130株主（九諸, p363）、九州電灯鉄道 1000株主（九諸, p188）、九州窯業顧問（T7.7.29 福日）、厚生舎代表取締役 ④ 500株主（実勢, p110）、深川製磁 ③ 100株主（実勢, p69）、旧佐賀軌道 ⑤ 30株主・旧川上軌道 ⑤ 50株主（実勢, p76）、肥前漁業副社長、佐賀百六銀行、九州電化工業、唐津築港、豊国セメント各取締役、深川造船所、九州電灯鉄道、九州板紙各監査役（要 T9, 役中 p12）、佐賀商工、九州農産肥料各相談役（T10.2.15 実業）など主に県内各社役員多数を兼ねた。吉田は「一銀行の経営のみに満足せずして…門司汽船会社を起すなど見かけによらざる大活躍を為して、一時たりとも休む事なき有様で…活動的事業家の好模型好標本たるべき人」（将来, p962）と評された。「胃腸病にて臥床中の処、病勢一向捗々しからざる」（T9.12.21 佐賀）状況にあった吉田は大正10年1月13日闘病生活の末、心身衰弱の結果死亡した。（T10.2.15 実業）なお吉田の妹ユキ（明治6年10月生れ）は後述の山口練一夫人（人 T7, や p78）

### 4. 大正中期の佐賀貯蓄銀行役員

本店は佐賀市大字呉服町、株数2,000株、頭取吉田久太郎 ⑤ 90株、専務山口練一 ⑭ 20株（吉田久太郎の義弟、後述）、取締役伊丹弥太郎<sup>(11)</sup> ⑭ 20株、深川喜次郎<sup>(12)</sup> ⑫ 30株、古賀善

兵衛<sup>(13)</sup> ② 120 株，監査役大島貞七<sup>(14)</sup> 40 株，野中万太郎<sup>(15)</sup> ⑭ 20 株，支配人大中正澄（後述）  
⑭ 20 株，大株主 ① 古賀銀行 307 株／総株数 2,000 株，② 山口練一 191 株，③ 古賀善兵衛  
120 株，その他 73 名 1382 株，株主人員 76 名であった。（要 T9，p3）

創立者の一角を占める古賀家は、大正 3 年 9 月には古賀銀行支配人太田米三郎の活躍で杵島郡  
山口村の山口銀行（明治 23 年 4 月設立）を引受け、佐賀市松原町 5 に移転し肥前貯蓄銀行と  
改称、古賀善兵衛が頭取に就任（市史，p166）、「古賀銀行の預金吸収機関」（実勢，p48）とし  
たから、持株そのものは継続しても直系貯蓄銀行と全面競合する佐賀貯蓄銀行との関係はむしろ  
希薄化したものと見られる。

## II. 破綻に至る経過

### 1. 大正中期の業績

大正 5 年 6 月末の預金高 49.0 万円，貸出高 38.6 万円に対して，7 年 6 月末の預金高は 82.0  
万円（5 年 6 月末比 33.0 万円増），貸出高は 64.2 万円（同比 25.6 万円増）（実勢，p36）であ  
った。大正期には毎期配当率 10%を維持し、「五万円の資本金を以て能く八十有余万円の預金を吸  
収」（実勢，p37）する点について『佐賀市史』は「相対的にはかなり率のいい資金集めをなし  
ている」（市史，p166）として、同行の効率性を評価しているが、それ以降の同行の動静につ  
いては言及していない。おそらく地元にも同行の情報が乏しいためかと思われる。8 年 11 月  
には貸付金 102 万円，頭取山口練一であった。（T10.8.30 法律）

8 年 12 月期では佐賀市大字呉服町，資本金 5 万円，払込金 2 万円，積立金 17,500 円，預り金  
1,157,502 円（定期預り金 149,418 円，当座預り金 169,353 円，其他諸預り金 815,752 円），借  
入金 141,750 円，貸出金 1,024,659 円（手形及証書貸付 841,856 円，割引及荷為替手形 179,802  
円），有価証券 255,403 円，預け金及現金 70,173 円，繰越及当期純益金 23,924 円（前期繰越  
金 10,106 円，当期純益金 13,818 円），諸積立金 500 円，賞与金 556 円，配当年一割 1,000 円，  
後期繰越金 11,761 円（要 T9，p3，佐百，p675）であり、「同行の業績は第 1 次大戦ころまでは  
順調に推移した」（佐百，p675）かのように一般に理解される外観を呈していた。

### 2. 反動恐慌による取付

『佐賀銀行百年史』によれば同行は「第一次大戦ころまでは順調に推移した。しかし 9 年の反  
動恐慌の影響を受けたうえ，同行役員が乱脈貸金が発覚して，9 年から 10 にかけて預金の大量  
取付けの憂目であった」（佐百，p675）とされる。（乱脈貸金の内容は後述）9 年春には「財界動  
揺の影響を受け軽微なる取付に遭遇したるも幸に無事沈静」（T10.2.20 B）したが、『銀行通信  
録』には 9 年の「年末より年初に掛けて再び預金の引出増加したる結果，専務取締役山口練一  
氏は責任を負ふて辞職」（T10.2.20 B）した事実が記載されている。2 年間に預金残高は 7 割に

激減したにもかかわらず、この間の地元『佐賀新聞』の同行に対する報道はなぜか極めて抑制的であった。おそらく佐賀新聞と同行との佐賀財界での政治的・人脈的な近親関係によるものと推測される。こうした『佐賀新聞』の抑制的な報道に依拠しているためか『佐賀経済のあゆみ』にも同行取付の記載はなく、「これまでも佐賀県下の銀行取り付けが何回かありましたが、それは隣県各銀行取り付けのそば杖でいどで、たいした波瀾もなく処理され」（あゆみ、p221）たのに対して、昭和2年春の「神崎実業銀行と古賀銀行の取り付けは佐賀県としてはいまだ経験したことのない重大事」（あゆみ、p220）と、佐賀貯蓄銀行の取付には言及していない。

また同行の支援団にもこの時期大きな打撃が加わった。すなわち9年12月20日佐賀貯蓄銀行頭取・吉田久太郎の実弟・吉田光次郎<sup>(16)</sup>が病死し、「令兄吉田久太郎氏も胃腸病にて臥床中の処、病勢一向捗々しからざる」（T9.12.21 佐賀）情況にあり、山口専務を支えるべき義兄弟の吉田兄弟はともに活動不能であった。10年1月13日吉田久太郎が死亡し、さらに同年3月10日同行監査役の大島貞七（前述）も京都で客死した。（T10.3.12 佐賀）

商業登記によれば山口練一は佐賀貯蓄銀行取締役を吉田頭取死亡の直前の10年1月10日辞任し、1月22日登記されている<sup>(17)</sup>。したがって『佐賀銀行百年史』の取付後に「山口練一を中心に、佐賀百六銀行ほか3行からの派遣を受けて再建に努めた」（佐百、p675）との記述には疑問が残る。

### 3. 支配人永倉義晴らによる整理

10年2月2日『佐賀新聞』に掲載された佐賀貯蓄銀行第49回営業報告では末尾に「尚支配人トシテ永倉義晴就任」と記載している。同行は根本的整理を要することとなり、九州電灯鉄道元久留米支店長の永倉義晴<sup>(18)</sup>を迎える一方、佐賀百六銀行、古賀銀行、栄銀行から行員を派遣して整理に着手した。10年4月末の佐賀貯蓄銀行の預金高は57.3万円（8年末比▲45.7万円）、貸出高は156.1万円（同比+53.6万円）という異常値<sup>(19)</sup>で、同業態の肥前貯蓄銀行は預金高377.5万円、貸出高153.6万円であるのに比して、貸出高がほぼ同額なのに預金高では佐賀貯蓄銀行は肥前貯蓄銀行のわずか15.2%にとどまるなど、10年1月11日から取付も沈静化した（T10.2.20 B）とはいえ9年末以来の取付で預金半減した後遺症がなお色濃く残存していることがうかがえる。一時は佐賀百六銀行<sup>(20)</sup>からの35万円など関係銀行からの資金支援に依存（佐百、p675）したものの、百六自体も放漫経営による多額の不良債権に苦しみ、旧藩の情誼から鍋島家に支援を要請するとともに日銀から小野好郎を常務に迎え入れざるを得ず、佐賀貯蓄銀行への支援にも限度があったものと思われる。

その後、10年6月ころ「津下<sup>(21)</sup>の検挙と同時に田中の預金証書が偽造である事が発覚し、田中は間もなく佐賀検事局に召喚の結果、遂に収監」（T10.6.5 福日）され、田中猪作と佐賀貯蓄銀行の悪縁（後述）が露呈した。田中猪作の地元の『佐賀新聞』も10年5月28日の東京発

で「有力者田中猪作氏は佐賀貯蓄銀行の二十三万円の預金証書を偽造した事が判って逮捕さる」(T10.5.28 佐賀)と田中猪作の事件後の動静を初めて報道した。23万円の偽造預金は8年12月末の預金総額115.7万円の約2割に相当する巨額なものであった。10年7月「製綿業を家業として...傍ら社会的公共事業に尽瘁」(人物, p121)してきた永倉支配人は僅か半年で「今般家事の都合により退職する事となり, 其後任として農工銀行前支配人より厚生舎に転じたる同舎専務取締役百田郡一氏就任」(T10.7.7 佐賀)した。

永倉は同行支配人に就任する直前の9年12月1日の『実業之佐賀』誌上に「私は地方の先輩縉紳に向って苦言を呈したいのであります。私は佐賀に生れ佐賀に死にます...縉紳紳商として...世間の尊敬を買ひますのは徒らに宏社の邸宅を構へ贅沢三昧に暮されるが為でありませぬ。社会公衆の為め努力を惜まざる行為あるためでありませう」(T9.12.1 実業)として「佐賀軌道を経営せらるる地方縉紳諸君の憤怒に触れん」(T9.12.1 実業)ことを覚悟で、「佐賀駅頭に立って中世史に見る如き旧式の馬鉄を見るに於て, 誰が羞恥の念に駈られぬ人があるでせうか」(T9.12.1 実業)として旧態依然たる馬車鉄道形態に固執する佐賀軌道「会社を鞭撻」(T9.12.1 実業)する持論を展開した硬骨漢でもあった。

永倉の辞任の真意は不明だが, 彼のこうした佐賀市と佐賀商業会議所の共同提案を出発点とする佐賀軌道経営陣に苦言を呈する反「財閥」的な性格上, 佐賀貯蓄銀行の整理を遂行する上で, 渋る同行株主に対して払込みを要請する必要があったが, 恐らくや同行大株主でもある「佐賀財閥」「地方の先輩縉紳」等との折り合いがスムーズには行かなかったのも一因かもしれない。現に永倉の辞任後の10年11月20日を期限として第二回払込を株主に通知, 10年12月末の払込金は従前の2万円より2.2倍の44,885円となった<sup>(22)</sup>。

#### 4. 後任の百田郡一

百田郡一は明治4年佐賀市の百田儀八の長男に生れ, 佐賀県会計課勤務後, 明治36年佐賀農工銀行に転じ書記長, 支配人(日韓, p3)の傍ら, 船成金の福田慶四郎の主宰する佐賀水産取締役, 福多商会監査役を兼ねた。大正8年大島貞七の個人経営から株式会社厚生舎の創立時に, 吉田社長の就任とともに佐賀農工銀行を辞して取締役兼支配人となり, 同社の吉田社長・大島専務の没後社長に就任した。(人物, p107)

永倉の後任の百田郡一は「世人より融通の利かぬ規律一徹の無愛想の誹りを受ける」(人物, p107)役人出身者であったが, 佐賀貯蓄銀行の整理事務を進め, 10年12月期には当期損失56,294円を計上した結果, 11年12月末では支店数..., 資本金5万円, 払込4.5万円, 積立金..., 預金高は10年4月末の57.3万円から51.9万円払戻して僅かに5.4万円にまで圧縮され, 一方貸出金は156.1万円から21.0万円回収して135.1万円となり, 有価証券は6.8万円, 当期純益金は▲3.5万円であった。(佐銀, p40)この間, 田中等への同行からの貸出金回収に関連し

て10年10月30日大阪の平林甚輔は「田中猪作氏の所有に係る福岡海岸埋築権」(T10.10.31 佐賀)の譲受と「福岡県遠賀郡黒崎炭山及び佐賀貯蓄銀行関係等に就いて交渉の爲め」(T10.10.31 佐賀)佐賀に来ており、同年7月就任したばかりの百田らと交渉したものと考えられる。『佐賀新聞』は「人も知る如く平林氏は新進の大事業家なり。此人にして田中氏対貯蓄銀行問題につき誠意を以て臨まんとする以上、両者の爲め真に福音と謂ふべし」(T10.10.31 佐賀)と期待したので、佐賀貯蓄銀行が田中から処分の困難な黒崎炭山<sup>(23)</sup>・海岸埋築権などの難物を担保に徴求していたものと推定される。13年まで百田郡一は厚生舎社長の「傍ら佐賀貯蓄銀行の整理事務に貢献する所ありしが、最近...共同貯蓄銀行...支店長に就任」(人物, p107)した。その2ヵ月あとの13年11月26日佐賀貯蓄銀行は破産宣告を受けた。

13年9月18日佐賀商業会議所は大蔵省の要請を受けた佐賀県と協議の上、「佐賀県銀行合併期成会」を設け、30余の地元銀行経営者と内々に話し合いをすすめて合併を推進した。(県経, p243)したがって百田郡一は西海商業銀行<sup>(24)</sup>を中心に相互銀行<sup>(25)</sup>、相知銀行<sup>(26)</sup>など好況期の放漫融資に起因する不良債権に苦しむ計6行の貯蓄部門の統合組織たる共同貯蓄銀行(本店唐津町, 大正10年11月19日設立・開業)が大正12年9月「念願の県庁都市への進出を果」(佐百, p649)すべく佐賀貯蓄銀行が基盤とする佐賀市にも支店を開設する際に、「同行宮島く徳太郎」頭取の切なる懇望を受け、遂に支店長に就任」(人物, p107)したものであり、収束に向かいつつある佐賀貯蓄銀行の顧客基盤の継承を目論んだ共同貯蓄銀行側の意図的な招聘人事と考えられる。

## 5. 佐賀貯蓄銀行の終焉

佐賀貯蓄銀行は10年11月20日を期限として株式の第二回払込みを行い、「払込(一株二付金十五円)無之ニ於テハ株主タル権利ヲ失ハルベク」(T10.11.3 佐賀)と公告した。11年9月任意解散に伴い、従前の救済融資が回収不能となる古賀、栄両行に各12.5万円の日銀特別融通が実施された<sup>(27)</sup>。結局、13年11月26日佐賀貯蓄銀行は破産宣告をうけた。(変遷, p292)同行の配当は債権総額992,050円53.1銭に対して、第二回(最終)配当額はわずかに8,001円46銭にすぎなかった。(S6.10.8 法律)『月刊新聞佐賀評論』は「細民の粒々辛苦の貯蓄機関たる佐賀貯蓄銀行を一朝にして踏みつぶし」<sup>(28)</sup>た主犯田中猪作を批判したが、主要な債権者の佐賀百六銀行の佐賀貯蓄銀行に対する融資金35万円も最終的に回収不能となった。(佐百, p675)姉妹行・佐賀百六銀行も吉田頭取在任中の大戦景気の時期に佐賀貯蓄と軌を一にした放漫な貸出を行なったが、「貸金の回収意の如く整はず...之れが爲め巷間種々の憶測を放ち、遂に一般取引者の不安を抱くに至」(人物, p45)り、11年役員の変更、減配、行員淘汰など内部整理に追い込まれる経過は前掲神山論文②に詳しい。なお佐賀貯蓄銀行は最終的に昭和6年12月22日解散した。(佐百, p957)



### III. 佐賀貯蓄銀行執行部と田中猪作の悪縁

#### 1. 山口練一

山口練一（佐賀市与賀町）の「祖先は佐賀市に於ける刀圭界の名門にして、嚴父故山口練治氏又斯界の人として声望頗る高かりし」（実勢，p36）といわれた。山口は明治元年11月20日佐賀県士族山口練治の長男に生まれ、36年家督相続、38年2月新しく佐賀商業会議所議員に当選（あゆみ，p497）、佐賀百六銀行、佐賀貯蓄銀行、筑肥軌道各取締役。吉田久太郎の妹ユキと結婚し、義弟となった。（人 T7，や p78）、山口は古巣の佐賀百六銀行から佐賀貯蓄銀行に移籍、取締役支配人としては「未だ少壯の士で…徒らに語らず、其の語らぬ中に無限の覇気と雄弁とを蔵して居る…貯蓄銀行の事務に従事し、著実に同行の成績を挙げて居る」（将来，p1005）、専務取締役としては「今や同行の経営は方寸一に山口練一氏の双手に委せられつつあるの状態」（実態，p37）と評された。山口は7年7月28日田中自身が創立事務を主導し専務に就任した九州窯業初代取締役（T7.7.29 福日）をはじめ、佐賀百六銀行、肥筑軌道 [③ 100株主（実勢，p122）]、九州麻糸紡績、九州窯業、厚生舎、枝光鉄工所、佐賀商工、唐津興業、西肥窯業各取締役（要 T9，役中 p190）、富士硝子取締役（実勢，p103）、田中が監査役の東洋建築材料取締役（T10.3.12 佐賀）、田中が監査役の佐賀土地建物取締役（T10.3.10 佐賀）、佐賀軌道取締役（T8.10.1 実業）、唐津水電興業取締役（帝 T11，p7）、佐賀土地建物創立時の実行委員（T8.9.1 実業）、（新）肥筑軽便鉄道発起人（T8.4.1 実業）、佐賀商工発起人（T8.5.1 実業）、佐賀商業会議所議員（あゆみ，p507）等を幅広く兼ね、佐賀米穀取引所 ② 167株主（実勢，p192）、九州麻糸紡績 ⑥ 500株主（実勢，p361）、日本電機鉄工 300株主（実勢，p54）などになっていた。このうち九州窯業、富士硝子、東洋建築材料、佐賀土地建物では田中猪作と、東洋建築材料、九州麻糸紡績、厚生舎では下村銓之助<sup>(29)</sup>と、佐賀商工では大中正澄と共通役員関係にあった。しかしたとえば厚生舎では10年4月15日藤山常一とともに辞任<sup>(30)</sup>するなど、財界から身を引き、山口練一の名は大正末期の『帝国信用録』には記載がない。（帝信 T14，p7）

#### 2. 大中正澄

大中正澄（佐賀市松原町）は慶応3年生まれの前佐賀藩士で、「佐賀百六銀行に勤務する事多年、同行の為に尽せし処尠なからず。大正四年佐賀貯蓄銀行支配人に任ぜられ、爾来今日に及べり」（実勢，p36）といわれ、山口と同じく百六からの転籍行員であった。「百六銀行は云はば佐賀藩主の銀行である関係から、其の重臣が重役となって居る」（将来，p920）姿が姉妹銀行にも投影されたものといえる。田中自身が専務に就任した九州窯業の創立総会では検査役に選任され、田中らが実施した創立事務の「審査の報告を為し」（T7.7.29 福日）たほか、5年時点では肥前製紙監査役（帝 T5，p16）、9年時点では肥前製紙、佐賀水産各取締役、佐賀商工監

査役（要 T9, 役上 p148）、佐賀市水ヶ江町で「常設活動大勝館を直営せる」（T8.8.5 実業）活動写真営業の佐賀フィルム<sup>(31)</sup>相談役（T8.8.5 実業）から監査役（実勢, p130）、佐賀商工発起人（T8.5.1 実業）、さかえたび筆頭取締役（要 T9, p6）等を兼ね、厚生舎 100 株主、日本電機鉄工 100 株主（実勢, p54）であった。大中は「其の社交に至っては実に多方面なるも、而かも一人の敵無く」（実勢, p36）と評されていた。大中は 15 年 2 月現在では九州農産肥料取締役に在任（要 T15, p7）しているが、大正末期の『帝国信用録』には記載がない。

### 3. 田中猪作

田中猪作は佐賀県佐賀郡神野村に明治 16 年ころ生れ、「前県会議員で憲政会に属し、議員中の雄弁硬骨漢として認められて居たが、大正八年農学校移転問題に際して自党の態度に嫌ず中立となり、前年総選挙には第二区（佐賀県佐賀郡）より立候補の武富時敏氏と競争」<sup>(32)</sup>すべく、「大木法相及古賀氏の援助に依り其郷里佐賀県第二区に於て政友会公認候補」<sup>(33)</sup>となったが落選した。田中は落選後上京、「家族を郷里佐賀県に残し、姪の某と麴町平河町六丁目に一戸を構へてゐた」（T10.5.26 読売）とされる。

一方企業家としての側面では福岡市橋口町に家業の田中猪作商店を営み（T7.7.29 福日）、「常に鉱山、埋立、相場等不安なる職業に従事」（T10.8.30 法律）した。大正 5 年時点で松浦工業（東松浦郡佐志村）、肥前精米（神崎郡神崎村）各取締役（帝 T5, p10, 16）、7 年田中猪作商店に創立事務所を置き、九州窯業を石村虎吉<sup>(34)</sup>らと創立して専務に就任（T7.7.29 福日）したのをはじめ、肥前煉瓦発起人・相談役 300 株主、日本電機鉄工初代監査役（T7.11.1 実業）、唐津興業、西肥窯業各取締役、九州電機鉄工、九州製鉄各監査役（要 T9, 役中 p21）、佐賀土地建物、九州農産各取締役、日本電機鉄工、富士硝子、喜和商事、東洋建築材料各監査役（要 T10, 役中 p28）、有田製磁監査役（帝 T11, p10）、亜細亜炭礦創立委員など多数の新設会社に関係した。11 年でもなお九州窯業取締役、九州製鉄監査役（帝 T11 職, p220）、唐津水電興業取締役（帝 T11, p7）であった。田中は神戸の大株致富信託の賛成人（T9.12.18 大毎）や佐賀県下の各社にも株主として広く関与した。このほか田中個人の事業として、帝国土地開拓に現物出資する原計画たる有明湾埋立事業、福岡海岸埋築事業、黒崎炭坑（遠賀郡）などがあった。大正初期の唐津方面では「事業家を冷視し危険視し... やり過ぎる切れ過ぎると評」（将来, p1006）する風潮があったというが、田中もこうした危険視された事業家に位置付けられよう。しかし 15 年 2 月現在では田中の兼務先は唐津水電興業取締役 1 社にすぎず（要 T15, p4, 役上, p210）、「其の前から鉱山や窯業会社等の事業に失敗したので選挙費用すらも未払の処多く、此の失敗と共に窮状に陥」<sup>(35)</sup>った田中を日銀は「山師」<sup>(36)</sup>的人物と見做しているが、筆者も「豪胆放縦の男で... 入監中も少しも動ずる色なく平然として益々肥満した」<sup>(37)</sup>田中を「虚業家」と考えている。

#### 4. 田中猪作との共同謀議

予審決定書によれば、山口練一頭取、大中正澄支配人らは佐賀貯蓄「銀行の枢機を握り居たる関係上、自然融通の利く地位にありしより、戦時の好況時代、平素親しき間柄にありし市外神野村田中猪作と相謀り、銀行の金を融通して各種の事業に手を出し以て後日の成功を夢みた」(T10.7.27 佐賀)とされる。一例をあげれば山口は大正4年12月黒崎町で炭坑試掘権を登録したが、共同鉱業権者は田中であつたと推定される(前述の注23)。百六銀行中野頭取にも「現に百六銀行の如きは、君敢て大株主と云ふにあらずして、而して能く頭取の任にあり」(県商, p5~6)との人望による経営者支配体制とみられた。県内各行の共同出資銀行の専門経営者である山口らは、中野同様に持株は極めて僅か<sup>(38)</sup>な上に、他行からみればライバル佐賀百六銀行の利益代表とも見做され勝ちで、立場は極めて微妙であつたものと推測される。地元関係者を多数取材した5年刊行の『九州の現在及将来』は山口を「氏はく佐賀貯蓄銀行の事務に従事し、著実に同行の成績を挙げて居る」(将来, p1005)と高評価するが、株主=ライバル行の掣肘から離脱し、経営者支配を確立するには株主に文句を言わせないほどの目覚ましい業績を挙げねばならぬという心理的な圧力が彼らを「銀行の金を融通して各種の事業に手を出し以て後日の成功を夢みた」(T10.7.27 佐賀)という過度の積極策に駆り立てたものと想像される。同行は5万円(払込2万円)の「資本金を以て能く八十有余万円の預金を吸収し...利回りの良好を贏ち得しむ」(実勢, p37)と評されたように、過少傾向にある払込資本に対する純益率は7年上期には22.3%に達するなど、表面的には「逐年預金の増加と共に業況順調裡に推移」(実勢, p36)するものと観察されていた。

#### 5. 大戦景気とその反動

8年末の山口の人物評にも「輓近地方事業界の発展に伴ひ、大に活躍する処あり、今や川上軌道、肥筑軌道、九州麻糸紡績、九州窯業等の諸会社に取締役として推され、当地実業界に大呂の重きをなせり」(実勢, p36)とある。九州窯業創立を報じた『福岡日日新聞』には「北九州が一大工場地と化し、近く東鉄、日本製鉄等の創設さるるあり、延いては...益々会社の事業は有望にして年五割の配当は決して難事にあらざる可し」(T7.7.29 福日)とあり、同社発起人たる田中、山口らは大戦景気の最中に破天荒の「年五割の配当」を対外的に標榜するほどの超強気であつたことをうかがわせる。7年6月期の佐賀貯蓄銀行の株券担保貸付金36.8万円は全体の67.4%も占めており(実勢, p36)、同時期の百六銀行の42.4%(実勢, p33)、唐津銀行の56.0%(実勢, p12)等に比して格段に高かつた。田中、山口らが発起人・役員等として関与した新設企業株式を積極的に担保として徴求していたことの反映と考えられる。

一方、「九州各地では一時驚くばかり土地熱が勃興し...土地ブローカーは福岡市のみでも好況時は約千名内外」(T10.9.9 福日)と報じられたほど、「九州随一の土地熱」(T10.9.9 福日)門

司・若松・洞海湾を中心に思惑が劇甚であった。「佐賀市一流の資本家...の多くは土地に投資し、家屋に投資するに急にして...碌々として消極的の土地家屋の投資に於て、高き利回りの尻拭ひをなす」(将来, p731)と評されたように、山口らも当時佐賀に蔓延した土地熱に煽られる形で、数名の佐賀貯蓄銀行幹部行員ともども「土地売買其他に手を出し」(T10.7.27 佐賀)た。こうして大正バブル期の起業ブーム・土地熱・鉱山熱という「好況時代余りに調子に乗り過ぎ」(T10.7.27 佐賀)同行の資金を投じたものの、9年以降の資産価格の暴落に遭遇して「俄然不景気の打撃を蒙」(T10.7.27 佐賀)ったとされた。9年12月現在での熊本税務監督局の調査によれば九州全域で「基礎の薄弱なるもの所謂泡沫的のものは相踵で破綻を暴露して解散の止むなきに至れるもの多々あり」(T10.7.27 佐賀), 破綻に近い会社も109社に達していた。佐賀でもこうした「氣息奄々の群小会社が蠢動して居る...彼の戦時成金会社と称するものが...今日の経済的萎微消沈...立ち行く会社も立ち行けなくなり、創立間もなく解散等の悲運に会したのも少くない」(T10.7.1 実業)と指摘された。いくつかの実例を挙げると、①西海製紙は9年3月以降に「手持原料の大暴落に逢着し、多大の打撃を蒙り、遂に大正十年八月...一時操業を休止」(人物, p44)し、②10年佐賀財界共同出資による佐賀土地建物(田中らが取締役)は清算に入り(T10.4.10 実業)、③百六銀行出身の船成金の福田慶四郎<sup>(39)</sup>らによる海運業の朝日商會は「欧州戦乱当時には海運界好況の爲め相当の利益を獲得」(人物, p12)したが、「大正九年後の財界不況に伴ふ海運界の不振と共に尠からざる打撃を蒙り」(人物, p89)大幅減資に追い込まれ、④橋本汽船部(下関)を創業した貸金業の橋本栄治(注31に前述)も金銭貸付で8年には1,704円の利益を出していたが(通覧, p1195)、「大正九年に至り...関係事業の爲め全財産を蕩尽し其の地位を失脚」(人物, p106)している。

佐賀貯蓄銀行でもこうした株式・土地・鉱山・船舶等の資産価格の暴落による戦時成金らの急激な没落傾向に伴う打撃に加えて、判明した大口貸付先としては田中猪作名義の20万円、山口練一名義の22万円、大中正澄名義の7万円をはじめ、「其他無計算に貸付たる金額の回収困難となり、自然銀行資金の欠乏を来したるより、一時の弥縫策として定期預金証書及び為替手形等の偽造を試み、之を他に担保として金員を借用し以て債務に充当せんと計り」(T10.7.27 佐賀)、頭取「<山口>練一及び重役は田中猪作が常に鉱山、埋立、相場等不安なる職業に従事し、而も当時何等回収の見込みなきに拘らず田中猪作と共謀の上」(T10.8.30 法律)、巨額の預金証書を偽造して当面の金策に充てたが、その後「田中猪作氏は佐賀貯蓄銀行の二十三万円の預金証書を偽造したことが判って」(T10.5.28 法律)、「私文書有価証券偽造行使詐欺等の重罪を冒し其害毒を中央生命に迄及ぼさんとした行為が発覚」(T10.8.30 法律)した。

初代頭取の中野致明にも「武士的精神を以て活動し、武士の道徳を以て実業界に 응용せるの潔士」(県商, p6)との評も定着しており、中野以降の鍋島直系の百六=佐賀貯蓄人脈は葉隠精神を継承する「藩士族の堂々たるもの」(将来, p920)と世の尊敬を集めていた。「口を開けば

…〈藩主〉閑叟公は佐賀藩の財政に快刀乱麻を断つた人」(将来, p1005)などと藩主を礼賛し「青年の血を湧かす様の事を言ふ」(将来, p1005) 山口も「現代実業家中稀に見る清廉の士なり」(実勢, p36)と見られ, 大中にも「謹直誠実なり, 居常刀剣を愛し斯道の博識を以て知らる. 亦古武士の遺流」(実勢, p36)との評もあった. しかしこうした「何処かに武士気質が閃いて居り, 世の所謂士魂商才と云った様な型」(将来, p920)との世間の期待とは大いに相違して, 「破綻百出の因を為し, 遂に刑事事件を惹起するに至」(T10.7.27 佐賀)り, 「疑獄事件として世人の注目を惹」(T10.7.27 佐賀)いたのであった.

### むすびにかえて

佐賀貯蓄銀行事件は10年7月予審が終結し, 佐賀地方裁判所の公判に付せられ, 第一回公判は当初「来る〈8月〉三十日午前八時当地方廷に於て開廷の筈」(T10.8.2 佐賀)であったが, 大幅に遅れ11月11日佐賀地方裁判所で内藤裁判長係りで開かれた.(T10.11.12 佐賀) 公判では「内藤判事より山口を初め各被告に対し事実の訊問ありたるが, 大体に於いて予審決定同様の之を是認し」(T10.11.12 佐賀), 翌日も事実について7名の被告は「大体に於いて予審決定の事実を是認して夜に入」(T10.11.13 佐賀)った. 最後に山口らが大筋で是認したとされる「予審決定理由書」の骨子を論評を加えず当時の報道(T10.8.30 法律)のまま記載して, むすびにかえたい.

① 8年11月1日佐賀貯蓄銀行「頭取山口練一並に同銀行重役外四名と共謀して…五万円の預金あるかの如く装ひ五万円の預金証書を偽造発行…田中は是れを種に」(T10.8.30 法律), 長崎市の高利貸東秀保<sup>(40)</sup>から三万七千五百円余を騙取した.

② 9年1月佐賀貯蓄銀行5万円の預金証書を偽造して嘉穂銀行(頭取麻生太吉)から44,379円を騙取

③ 9年3月2日2万円の為替手形を偽造して久留米市の金貸業中西一<sup>(41)</sup>から19,702円40銭を騙取

④ 9年5月1日佐賀貯蓄銀行の支払保証ある10万円の為替手形2枚を偽造して大阪市の金貸業木原, 千楯両氏に裏書を依頼

⑤ 9年5月25日1万円の手形を偽造して佐世保市の中村芳太郎<sup>(42)</sup>から9,710円を騙取

⑥ 9年6月佐賀貯蓄銀行の4万円の為替手形2枚, 3万円の為替手形1枚, 合計11万円を偽造して朝鮮銀行東京支店から99,000円を騙取し, 「前記利子の一部並に〈田中の中央生命〉保険会社へ入社運動雑費に当てた」(T10.8.30 法律)

⑦ 9年6月佐賀貯蓄銀行の20万円の預金証書を偽造し, これを担保に「印紙魔」津下精一から15万円を騙取, うち3万円は収入印紙で受け取った」(T10.8.30 法律)

⑧ 9年10月7日「田中猪作の振出, 佐賀貯蓄銀行専務山口練一裏書, 返済期限十一月三十

日日付の十五万円為替手形で津下の手から現金で十三万円を捲上げた」(T10.8.6 大毎)

⑨ 9年11月15日東京常盤商会<sup>(43)</sup>に8万円の為替手形を振出して42,500円を騙取

⑩ 9年12月19日妹尾商業銀行<sup>(44)</sup>から4万円を騙取(T10.8.30 法律)

⑪ 「同行員代居猪吉<sup>(45)</sup>、同北島富一<sup>(46)</sup>...西村清治<sup>(47)</sup>の三名と土地売買其他に手を出したる負債の窮策として定期預金証書の偽造を為し、数回に亘り有ゆる手段を講じて数万円の大金を騙取」(T10.7.27 佐賀)した。

⑫ 亜細亜炭礦<sup>(48)</sup>創立委員の田中猪作は8年11月佐賀貯蓄銀行に5万円の定期預金をした<sup>(49)</sup>。

## 注

- (1) 「虚業家」については拙稿「企業家と虚業家」『企業家研究』第2号、企業家研究フォーラム、平成17年6月参照。すでに拙稿で言及したものに船場銀行・守山又三(大正3年)、北浜銀行・岩下清周(3年)、花巻銀行(4年)、日本積善銀行・高倉為三(11年)、旧大分銀行・小野駿一(11年)、昌栄銀行・松島肇(13年)、東京国債銀行・辻川敏三(13年)、共栄貯金銀行・小出熊吉(大正末期に破綻状態)などがある。
- (2) 本間靖夫氏は『地方金融史研究』誌で、「伊丹家の事業とされるものは...29年創立の佐賀貯蓄銀行」(本間靖夫「佐賀財閥の形成・没落と地方銀行」『地方金融史研究』第18号、1987年3月、p91)、「伊丹、深川、古賀を結びつけたのは佐賀貯蓄銀行(共同経営)」(同上、p92)と指摘し、同論文を改訂した「佐賀財閥」の中も佐賀貯蓄銀行について言及している。(本間靖夫「佐賀財閥」渋谷隆一・加藤隆・岡田和喜『地方財閥の展開と銀行』日本評論社、平成元年)
- (3) 神山恒雄①「佐賀県の銀行合同」石井寛治・杉山和雄編『金融危機と地方銀行戦間期の分析』東京大学出版会、平成13年、p311、②「1920年代の佐賀百六銀行救済における日本銀行と鍋島家」『佐賀大学経済論集』33巻3・4号、平成13年1月、p187、192
- (4) 日本保険学会昭和19年度大会自由論題報告「“虚業家”による生保乗取と防衛側のリスク管理—中央生命対田中猪作の事例を中心として—」
- (5) 本稿は平成19年8月29日地方金融史研究会夏季合宿において「大正期破綻銀行のリスク選好と『虚業家』(続)—共栄貯金銀行、佐賀貯蓄銀行などのビジネス・モデルの虚構性をめぐって—」として報告したもの的一部分に加筆したもので、科学研究費補助金「金融ビジネス・モデルの変遷」(基盤研究B、課題番号17330079、代表者斎藤憲氏)の研究成果の一部である。進藤寛氏をはじめ種々ご指摘を賜った各位に謝意を表したい。
- (6) ほほ同じころ佐賀「市内の有力者によりて発起せられ」た佐賀セメント(明治30年4月設立)の場合も、「会社の主権は佐賀市の富豪伊丹家一派の掌握する所にして殆んど同家の営業たる観あり、而して氏の栄銀行と同一の系統に属し異体同心と云ふべく」(放資、p215~6)と評された。明治34年ではたとえば伊丹弥太郎家の機関銀行たる栄銀行は佐賀貯蓄銀行に1,000円の当座貸越極度額を設定していた。(本間前掲論文、p638)
- (7) 共栄貯金銀行は拙稿「老舗庶民金融機関のビジネス・モデル変容と頭取の『虚業家』的性格—破綻行・共栄貯金銀行頭取小出熊吉を中心として—」『彦根論叢』第366号、平成19年5月参照。なお佐賀市は当時「九

## 大正期破綻銀行のリスク選好と“虚業家”

州諸大都市中，中央諸大銀行の支店を有ざるは稀也」(将来，p731)と評されていた。

- (8) 7年6月現在で同行の⑧40株主でもあった武雄銀行などが武雄町の代理店を引受けたと考えられる。
- (9) 佐賀馬車鉄道については坂井一実「佐賀県における馬車鉄道事業—佐賀馬車鉄道を中心に—」『交通史研究』第28号，1992年4月参照
- (10) 九州生命は拙稿「生保破綻と“虚業家”による取奪—九州生命詐欺破産事件と河村隆実のリスク選好—」『滋賀大学経済学部研究年報』第9巻，平成14年12月参照
- (11) 伊丹弥太郎(佐賀市本庄町)は大地主・多額納税者，士族商業，明治37年12月起業銀行600株主，栄銀行頭取，佐賀商業会議所議員
- (12) 深川喜次郎は深川財閥当主，地所(株)，肥後汽船社長，大川運輸副社長，深川造船所，佐賀貯蓄銀行，佐賀セメントほかに関係
- (13) 古賀善兵衛は明治14年4月13日先代の長男善太郎として生れ，明治40年家督相続。古賀銀行頭取，肥前貯蓄銀行頭取，佐賀農工銀行，佐賀貯蓄農工銀行，肥前漁業各取締役，佐賀セメント監査役，佐賀信託社長
- (14) 大島貞七は佐賀石油合資代表社員，神崎実業銀行専務取締役兼佐賀支店長(実勢，p37)，厚生社の旧オーナーから厚生舎常務①2,000株主，佐賀セメント取締役，肥前漁業監査役(帝T5職，p68)，山口・大中が役員佐賀商工監査役(実勢，p110)
- (15) 野中万太郎(佐賀市材木町)は文久8年8月士族の子に生れ，御用薬・烏犀円発売元の養子となり，「市政や公共事業には率先尽力」(将来，p1001)，大正4年佐賀商業会議所副会頭就任，佐賀貯蓄銀行，東亜化学工業各監査役(二四，のp16)
- (16) 吉田光次郎は九州飲料社長，佐賀商工常務，九州窯業，西肥銀行，厚生舎各監査役
- (17) 登記公告(T10.1.25佐賀)。なお山口が兼務する中央生命取締役を辞したのは田中猪作と同時の大正10年3月23日
- (18) 永倉義晴は明治元年佐賀神野町に生れ，関西鉄道運輸課，佐賀市勤務を経て明治44年九州電灯鉄道庶務，倉庫各課長，佐賀支店長，大正9年久留米支店長を辞し製綿業開始(人物，p121)，佐賀市商工会副会長(実勢，p121)
- (19) T10.5.12佐賀。ただし『佐賀市史』，p22の表では預貸の表示が逆
- (20) 佐賀百六銀行については神山前掲論文のほか，山田登「佐賀百六国立銀行の創業事情について」『東京と佐賀』197-202号，昭和52年7-12月，山田登「佐賀百六銀行物語」『新郷土』410-423号，新郷土刊行協会，昭和58年5月-59年6月
- (21) 津下事件については拙稿「大正バブル期の泡沫事業への擬制“投資ファンド”とリスク管理—“印紙魔”三等郵便局長の“虚業家”ネットワークを中心に—」『彦根論叢』第364号，平成19年1月参照
- (22) 5万円との差額の端数は払込不能分か。
- (23) 大正4年12月登録の黒崎町石炭試掘鉱区「登1019」「登1020」の鉱業権者は山口練一外一名(『福岡鉱務署管内鉱区一覧』大正5年7月1日現在，p4)

- (24) 西海商業銀行は明治 31 年創立、「先進たる唐津銀行と対峙」（実勢, p38）し積極策をとった結果、不良債権を抱え込んだ。西海商業銀行の経営難は注（3）前掲神山論文①, p323 以下を参照。
- (25) 相互銀行は大正 13 年 3 月頭取の浦元清が自ら関係している事業に不正行為が発覚して信用を失墜、取付けられたが（佐百, p625）、田中・山口両名とも 9 年には浦元が代表取締役の唐津興業、富士硝子両社取締役を兼ねるなど密接な関係にあった。
- (26) 相知銀行は「時運に策応して各種事業を主宰」（実勢, p9）する策士と評された佐賀県非政友派の溝上市太郎が専務で、「創立の経過は政党的勢力の利用に負ふ所尠からざりし」（実勢, p10）銀行であったが、戦後反動不況による石炭産業等の衰退の影響を受け、大正末期には悪化の一途をたどり、昭和 2 年 5 月 16 日休業、4 年 7 月 12 日解散した。（佐百, p955）相知銀行新株を引受け、⑤ 100 株主の田中は肥前煉瓦、佐賀特許醤油などで行動を共にした。
- (27) 『日本銀行百年史第三巻』日本銀行, 昭和 58 年, p39. 破産当時の取締役は深川喜次郎ら。「大正十三年（ネ）第三号破産事件」の破産管財人は佐賀市大坪春雄、内田清治の両弁護士（S6.10.8 法律）
- (28) 『大審院刑事判例集』第 10 巻, p716
- (29) 下村銓之助（佐賀市水ヶ江町）は東洋建築材料社長、多久鋳業、佐賀演劇、佐賀綿ネル、佐賀珪瑯、東亜化学工業各取締役
- (30) 厚生舎『第五回営業報告書』大正 10 年 7 月, p5
- (31) 船成金の橋本栄治が取締役（諸 T5 下, p1113）。橋本栄治（神崎郡三田川村）は貸金業の橋本合資（諸 T5, 下 p1119, 帝 T5, p6）、西肥銀行専務、佐賀水産取締役、佐賀フィルム、有田製磁各監査役
- (32) (35) (37) 伊藤由三郎編『銀行犯罪史附予防法』銀行問題研究会, 大正 11 年, p5
- (33) 村山久雄編『津下事件の裏面に伏在せる薩派及政友会一味の醜怪事実』大正 10 年, p24
- (34) 「土著人にして... 外来分子と結合して事業を為」（将来, p900）す石村虎吉（福岡市）は醤油醸造・天狗煙草卸・楽器商、九州窯業社長、西部合同瓦斯専務（紳 T11, p4）、福岡市会議長
- (36) 日本銀行大阪支店「増田ビルブローカー銀行整理顛末」大正 10 年 2 月『日本金融史資料昭和続編』付録第 3 巻, p268 所収。この時期の地元の人物列伝として定評ある『佐賀県銀行会社実勢』、『佐賀県の事業と人物』などをはじめ、田中を掲載しないものが多い理由もこうした関係か。
- (38) 大正 7 年 6 月末では山口練一の持株は 20 株（実勢, p37）だが、9 年では ② 191 株主で、古賀善兵衛 ③ 120 株を超過（要 T9, p3）
- (39) 福田慶四郎は佐賀百六銀行入行、取締役、大正 2 年海運業に投資、船成金となり「船舶より得たる利益にて... 有ゆる新事業を企画し之が創立に執掌」（人物, p88）、百六銀行、佐賀商工、佐賀紡績、九州麻絲紡績、東亜化学工業、肥前電気鉄道各取締役、大正 9 年百六銀行頭取就任
- (40) 東秀保（長崎県西彼杵郡浦上山里村）は農業（紳 T11, p22）、貸金業、（帝信 T14, p10）、長崎米穀取引所理事（実勢, p363）、長崎製鉄監査役（要 T11, 役下 p82）、大正 8 年 11 月に 5 万円の定期預金をした田中猪作から預金債権を譲受し、佐賀貯蓄「銀行ヨリ三万円ノ支払ヲ受ケ」（『大審院民事判例集』第 4 巻, p205）た。



## 大正期破綻銀行のリスク選好と“虚業家”

- (41) 中西一（久留米市日吉町）は旭桜酒造，柳河商事，九州酸曹各取締役（要 T11 役中，p93）
- (42) 中村芳太郎（佐世保市天満町）は中村商事専務，九州硅藻土工業監査役，年商 3~5 千円（帝信 T14, p6, 要 T11 役中，p100）
- (43) 常盤商会（麹町区永楽町）は外国火災保険代理業，明治 43 年 10 月資本金 7 万円で設立，社長松方五郎
- (44) 妹尾商業銀行は明治 45 年 6 月東京に設立，大正 10 年 4 月 22 日破綻，昭和 3 年 8 月 17 日営業免許取消（変遷，p396）
- (45) 代居猪吉（佐賀郡久保田村）はさかえたび取締役（実勢，p74），九州農産肥料監査役（要 T11 役下，p177, 帝 T11, p13）。ボルネオ護謨株を担保に百六から借入れ焦付（前掲「佐賀百六銀行物語（8）」）
- (46) 北島富一（佐賀市水ヶ江町）はさかえたび取締役（実勢，p74），九州農産肥料監査役（要 T11 役下，p142, 帝 T11, p13）
- (47) 西村清治（佐賀市呉服町）は乾物荒物商・住吉屋（商，M31, し p4），荒物商・乾物，電話 342 番（案内，p6）
- (48) 亜細亜炭礦は拙稿「“虚業家”による誇大妄想計画の蹉跌—亜細亜炭礦，帝国土地開拓両社にみるハイリスク選好の顛末—」『彦根論叢』第 368 号，平成 19 年 9 月参照
- (49) 大正 14 年（オ）118 号事件第三民事部判決，事実，『大審院民事判例集』第 4 卷，p205

### 引用文献略号一覧（発行順）

[佐賀県内文献] 県商... 堂屋敷竹次郎『佐賀県商工名鑑（附．成功者列伝）』すいらい新聞社，明治 40 年，案内... 『佐賀商工案内』佐賀商業会議所，大正 3 年，実勢... 酒井旭川編『佐賀県銀行会社実勢』，佐賀県銀行会社発行所，大正 9 年，人物... 酒井福松（旭川）・村川嘉一（春浪）編『佐賀県の事業と人物』佐賀県の事業と人物社，大正 13 年，あゆみ... 中山成基『佐賀経済のあゆみ』昭和 41 年，佐賀佐賀商工会議所，佐賀... 『佐賀銀行史』佐賀銀行，昭和 46 年，県経... 中山成基『佐賀県経済百年史』佐賀新聞社，昭和 49 年，市史... 『佐賀市史第四卷』昭和 54 年，佐百... 『佐賀銀行百年史』佐賀銀行，昭和 57 年/[会社録等] 商... 鈴木喜八・関伊太郎編『日本全国商工人名録』，明治 31 年，日韓... 『日韓商工人名録』実業興信所，明治 41 年，放資... 豊田喜三編『九州の事業界放資之友』豊田両替店，大正 2 年，将来... 野依秀一『九州の現在及将来』実業之世界社，大正 5 年，九諸... 『九州諸会社実勢』大正 6 年，菊竹金文堂，家名... 『大日本実業家名鑑』大正 8 年，通覧... 農商務省編『会社通覧』大正 8 年 12 月末現在，二四... 『一九二四年に於ける大日本人物史』大正 13 年，変遷... 『本邦銀行変遷史』銀行図書館，平成 10 年，帝... 『帝国銀行会社要録』帝国興信所，要... 『銀行会社要録』東京興信所，諸... 商業興信所『日本全国諸会社役員録』，人... 『人事興信録第五版』人事興信所，紳... 交詢社『日本紳士録』交詢社，帝信... 『帝国信用録』/[新聞・雑誌] 佐賀... 『佐賀新聞』，肥日... 『肥前日日新聞』，実業... 『実業之佐賀』，読売... 『読売新聞』，大毎... 『大阪毎日新聞』，福日... 『福岡日日新聞』，法律... 『法律新聞』，B... 『銀行通信録』